

第46回「小さな親切」作文コンクール

子どもたちが教えてくれた “大切なこと”

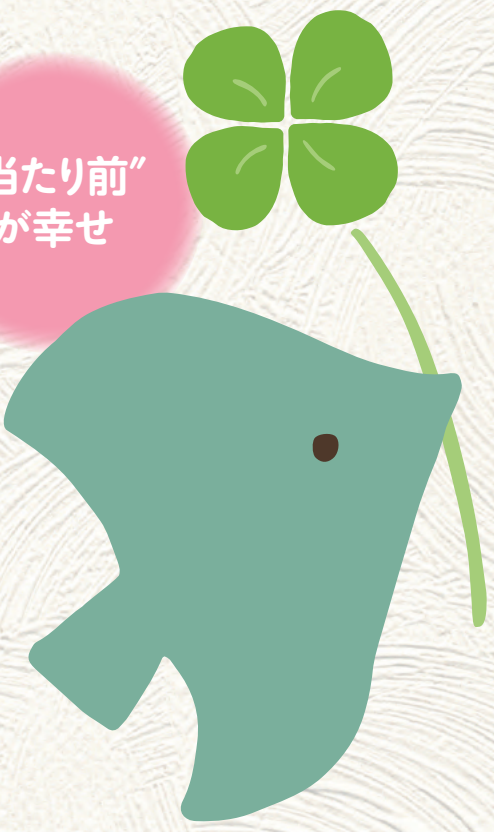
昨年度の作文コンクールは、休校やマスク不足、日用品の買い占めなど、コロナ禍をどこか「非日常」の出来事として描いている作文が多かったように思います。しかし、コロナの発生から約2年、“ウィズコロナ”は「日常」に。

今年度の特別テーマ「コロナが教えてくれたこと」に寄せられた作文からは、今の子どもたちの生活・心情の変化が見えてきました。

そして、幸せの本質や人の心のあり方など大切なメッセージがたくさん詰まっています。



大人への
批判の目



“当たり前”
が幸せ



“人の心”を
教えてくれた
コロナ

今年度の入賞・入選作品は、「小さな親切」運動のWebサイトで順次公開中。

https://www.kindness.jp/activity/sakubun/sakubun-award_page/

なお、入賞・入選者名簿は本誌11頁に掲載しています。

子どもたちが教えてくれた大切なこと

【内閣総理大臣賞】

心に咲いたおばあさんの花

福岡県 敬愛小学校 六年 安田 悠真

今年も彼岸花が咲く季節になった。道路沿いに咲いている彼岸花を見ると、僕は、いつかのやさしいおばあさんの笑顔思い出す。

おばあさんに会ったのは、一年前の初夏だった。僕が信号待ちをしていたとき、おばあさんは近所の植えこみの手入れをしていた。ちょうどコロナが流行して、外出自粛がさげられていた頃だ。この影響で、年二回行われていた地域の清掃活動も中止になってしまった。

すると、どうだろう。いつもきれいだった道路沿いの花だんが、みるみるうちに雑草だらけになっていった。雑草は僕の身長を追い越して、ぐんぐん大きくなっていく。僕は、しかたがないと思っていた。雑草はいやだけれど、僕一人でどうにかできるものじゃない。近いうちにコロナが落ち着けば、またみんなできれいにできるだろうと思っていた。

でも、そのおばあさんは違った。たった一人で、自分の背たけよりもうんと高い雑草を刈り、小さな球根を植えていたのだ。僕は驚いて、その様子を見つめた。おばあさんが、球根をいとおしそうに両手で包み、そっと地面に植えていたからだ。まるで球根におまじないをかけるように。僕はどうしても気になったので、思いきって話しかけてみた。

「どうして、ここに球根を植えるんですか。」

おばあさんは、笑って言った。

「花を見て、みんなに喜んでもらいたい。コロナ

で大変なときだからこそ、誰もが元気にすごしたいと思っっているはず。この花で、誰かが元気になったらいいなって。私も、誰かのお役に立てていると思ったら、うれしいの。秋には彼岸花が咲くから、楽しみにしているね。」

僕はハツとした。今まで僕は、親切は目の前の困っている人のためにするものだと思っていたからだ。会ったこともない、話したこともない誰かのためにする親切もあるんだ。

僕の心に、おばあさんの笑顔と言葉がずしんと響いた。おなかの底が温かくなって、元気をもらえたような気がした。僕はおばあさんに、

「僕も元気が出てきました。ありがとうございました。」と言った。おばあさんが、

「あなたの心を元気づけることができ、今日はなんていい日なのかしら。」

と言って、ほほえんでくれた。そうしたら、おばあさんの笑顔が、僕の心に花のように広がって、じんわりとうれしかった。

彼岸花は今年も、目をうばわれるような、あざやかな赤い花を咲かせた。僕はその向こうに、おばあさんの笑顔思い出している。今年も彼岸花が咲いたのは、きっと、おばあさんの手入れのおかげだ。おばあさんが僕の心に咲かせてくれたやさしさの花。僕はこれからも、この花を大事に育てていこう。今度は僕が、誰かの力になれるように。



子どもたちの作文を収録した「作品集」は2月15日発行。ただいま、予約受付中！

令和3年度作品集
『しあわせは君のそばに』
価格：1冊450円(税込・送料別)

申込み：氏名・送付先・電話番号・購入希望数をご記入の上、FAXかメールをお送りください。

FAX：03-3263-3838
Email：skm1963@kindness.jp

当たり前が幸せ

今年度、圧倒的に多かった作文のテーマは、コロナ前の日常が「いかに幸せだったか」気づいたというもの。学校行事や修学旅行に加え、人生の節目となる入学式や卒業式、一生懸命練習に打ち込んだ部活動の大会などが中止となり、多くの小中学生が残念な想いを綴っていました。

コロナによって、一生の思い出となる機会がたくさん奪われてしまったことに、胸が痛くなりますが、これまで当たり前のように過ごしていた学校や家庭での日常は、「決して当たり前ではない、とても幸せなものだったのだ」と振り返る子どもたち。だから、これまで以上に、家族や身近な人に感謝しながら、一日一日を大切にしよう…と、子どもたちは前向きに「今」を生きています。

年を重ねた大人のように、達観した子どもたち。早くのびのびとした生活ができるよう願っています。

大人への批判の目

クラスメイトとの楽しい食事の時間である給食は「黙食」となり、友達と遊んだり、家族との旅行や外食もできなくなりました。学校や家で、様々な制限を強いられている子どもたちの「息抜き」は多くありません。

そんな中、テレビで目にするのは、緊急事態宣言中にも関わらず、路上や居酒屋で遅くまで飲み、ハメを外す大人たちの姿。自分たちは感染しない・させないように、いろいろな我慢をしているのに、なぜ大人はルールを守ることができないのか、と怒りをぶつける作文もありました。

また、「コロナ差別」「自粛警察」など、他人を攻撃する人に対しても厳しい意見が。「憎むべきはウイルスであって、人ではない」と、多くの子どもたちが相手を気遣う心の余裕を持つよう訴えています。

人の心を教えてくれたコロナ

家族や身近な人がコロナに感染したり、濃厚接触者になった体験を書いた作文もいくつもありました。通っていた幼稚園で感染者が出たため、濃厚接触者になった妹に、思わず「近寄らないで！」と言ってしまった小学生は、幼い妹を傷つけた罪悪感でいっぱいになりながらも、自分の心を見つめ、差別は決してはいけない、コロナが「人の心」を教えてくれた、と綴りました。

不安や恐怖によって生まれてしまう「差別の芽」。それを摘むことができるのは、唯一「人の心」思いやりの心」だけ。コロナに打ち勝つためには、「人の心」を失ってはならないと多くの子どもたちが気づいてくれたことは、嬉しい限りです。